



Title	虚辞のnoについて
Author(s)	長谷川, 信弥
Citation	Estudios Hispánicos. 1993, 17, p. 57-68
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/97922
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

虚辞の no について

長谷川 信弥

0. 本稿では、一般に「虚辞の no」(no expletivo)といわれている用法について、まとめてみたいと思う。フランス語の学習者にとっては、比較的なじみのあるこの用法も、スペイン語についての網羅的な記述はこれまで必ずしも十分になされているとはいえず、これが見られるいくつかの場合についての考察が個々になされていたり¹⁾、否定表現のひとつとして扱われていたりするのみである。²⁾ また、スペイン語の文法書でのこの no の定義が与えられているものもほとんどなく、「虚辞」に対して広義の解釈が与えられているものが散見される程度である：³⁾

(1) "Dícese de ciertas palabras que aparecen en algunos tipos de oraciones sin ser gramaticalmente necesarias..." (Mounin, 1982)

(2) "Se dice de cualquier término no estrictamente necesario para la frase, por ejemplo, *pues*, en *épues* por *qué no vienes?*"

(Lázaro Carreter, 1984)

これに対して、フランス語の文法書では ne に対して、「否定の副詞として機能しない」(佐藤, 1991)などの説明がなされているが、「従節中に潜在する否定の観念を反映する」(朝倉, 1955)といった理由づけもある。

そこで、まず簡単にフランス語の事例を検討、参考にして、次に最近のスペイン語文法書にあげられている分類に沿って見てゆくことにする。

1. フランス語において扱われているこの用法には大きく分けて次のようなものがある。

[1] 不等比較文の第二項(従節)に現れる場合。

この場合のみ虚辞の *ne* は直説法の動詞と共に現れる。

- (3) *Il est plus(moins) grand que vous ne pensez.*(A-225)⁴⁾

(彼はあなたが考えているよりは大きい(ほど大きくない))

この例では *ne* がほとんど規則的に用いられるというが、主節が否定や疑問のときには(4)のように普通 *ne* は現れないが、(5)のように *ne~plus que* のときには特に従節に否定の意が含まれるため、*ne* が用いられる。

- (4) *Il n'est pas plus riche qu'il était.*(S-372)

(彼は昔以上に金持ちになっているわけではない)

- (5) *Je ne le connais plus que vous ne le connaissez.*(A-226)

(私はあなたと同様に彼を知らない)

このように不等比較文において現れる *ne* は、先に定義として述べたように、潜在する否定の観念を反映しているという。⁵⁾

[2] *craindre, avoir peur* など危具その他類似表現の従属節に現れる場合。

この場合は、(6)に対し、(7)が前提となっていて、それはつまり従属節に否定の意があるためだと説明されている。また、その起源は(8)のようにラテン語にもとめられるとも説明されている。⁶⁾

- (6) *Je crains qu' il ne vienne.*(=*Temo que venga.*) (M-178)⁷⁾

- (7) *Je désire(veux) qu'il ne vienne pas.*(A-226, K-147)

- (8) *Timeo ne veniat.*

フランス語の場合、完全な否定形 *ne ~ pas* と区別されるために(9)のような文においては意味が異なってくるという。

- (9) *Je crains qu'il ne vienne pas.*(=*Temo que no venga*) (M-178)

これに対応させているスペイン語訳からすれば、(9)にあらわれる *no* は虚辞ではないことになり、この種の文でスペイン語は虚辞を許さないことになるが、後でみるようにそこでは別の現象がみられる。

[3] 疑惑、否認の動詞が否定形や疑問形のとき。

(10)にみられる *ne pas douter* は *affirmer, croire* とは同意味ではなく、漠然とした不確かさや疑念が残され、これが *ne* との共起を許すのに対し、肯定形の(11)でみられないのは *douter* 自体に否定や疑惑の意が含まれているためだと説明されている。いずれにせよ「虚辞」の出現になんらかの理

由を求めようとしているのではないかと思われる。

- (10) Je ne doute pas qu'il n'arrive à l'heure.

(=No dudo de que llegue a la hora.) (M-262)

- (11) Je doute qu'il arrive à l'heure.

(=Dudo de que llegue a la hora.) (M-262)

- [4] avant que, sans que のあと。

これらの例での ne の使用は自由または一定しないという。

- (12) Venez avant qu'il (ne) parte.

(=Venga antes de que parta.) (M-265)

- (13) Il viendra sans que je (ne) l'appelle. (K-146)

後述するスペイン語では, antes de que, sin que には no が現れない一方, no の現れる hasta que にあたる jusqu'à ce que では, ne は現れない。

これ以外にも妨害・用心を表す語の後にも用いられるというが, こういった諸用法を参考にして, それにあたるスペイン語でどのような諸相を示すのかみてゆくことにする。

2. スペイン語のこの用法についての網羅的な記述は多くないが, Butt and Benjamin (1989) は項目別にまとめている。⁸⁾ まず, この分類を用法①～⑤として, そこにあげられている例をもとにして諸説を検討してゆくことにする。

用法①: 口語で並列するふたつの que を避けるため。

- (14) Prefiero que llueva que no que haga tanto calor.

この例文では, 本来の preferir～ a ～で言い替え,

- (14') Prefiero que llueva a que haga tanto calor.

とすることができるという。

この言い替えがふたつの que の耳障りな衝突 (choque cacofónico) の回避としてすすめているのは Moliner (1983) で, そこでは(15)を(16)(17)のように言い替えることができるとしているが, no の使用については言及していない。⁹⁾

- (15) No puedo hacer más que que lo fijes tú mismo.
 (16) Lo más que puedo hacer es que lo fijes tú mismo.
 (17) No puedo hacer más sino que lo fijes tú mismo.

しかし、これと同じ理由で、(18)のような *preferencia* の動詞のときに、衝突を避けるために *no* の使用をあげているので、(15)でもこの方法が可能となろう。

- (18) Prefiero (Mejor quiero) que te estés durmiendo que no que trabajes de mala gana.

また、この用法について、Bello (1949) は(19)をあげているが、これは少なくとも19世紀前半以前の例文であり、これは現代の用法をとりあげているとはいえないだろう。

- (19) Siendo la marina el único o casi el único consumidor de esta especie de maderas, es más natural que dé la ley, que no que la reciba.(Jovellanos)

Seco (1986) のあげている例(20)は、ことわざ的な内容を持つものであり、この用法が今日的に使われているとただちには言えないのではないか。

- (20) Más vale que sobre que no que falte.

以上のことからこの用法について言えることは、Moliner などに *no* の使用例がみられるものの、これが口語的な用法であるとされていることや *preferir* の時のような言い替えが可能であることから、現代文で使われているケースは少ないように思われる。

用法②: 口語体で比較文、とくにその不定詞の前で。

この用法は、さきにみたようにフランス語では一般的な用法であるが、スペイン語での *no* の使用はそれほど多くないように思われる。

- (21) La obra de R. vale más para un conocimiento de la derecha que no para conocer la República.(M. Tuñón de Lara)
 (22) ...tensión más por problemas internos que no por preocupación por el país.(Cambio 16)

(23)は Bello のあげる例だが、この例についての説明はない。

(23) Más quiero exponerme a que me caiga el aguacero, que no estar-me encerrado en casa.

これらの例文からフランス語でいわれていたような第2項目の「潜在的な否定の観念」があるか否かを論ずることはむずかしい。次の Seco のあげている(24)は、1771年版 Real Academia Española の文法書にある例文(25)に由来することが明らかである。(26)もあわせてあげているアカデミアによれば、この no は省略可能で、省略しても意味に変化はないが、これは肯定を強めるためのもので、肯定されているものをより強めるためによく置かれるという。

(24) Es mejor ayunar que no enfermar.

(25) mas quiero ayunar que no enfermar.

(26) mejor es el trabajo que no la ociosidad.

Rivero (1970) は否定についての考察の中でこういった不等比較文をとりあげ、(27)には(28)が埋め込まれているという。

(27) Tu amigo está más tonto que el año pasado.

(28) tu amigo no estaba tonto el año pasado

このことは、(29)(30)のような no を入れた文と入れない文とが書きかえ可能だという事実によって確かめられるとしている。

(29) Mi hermana era más rubia de niña que (no) ahora.

(30) Alicia come más que (no) ayer.

一方、(31)のように前半に否定があると no を入れた文は非文となるという。

(31) *Mi amigo no se encuentra mejor ahora que no esta mañana.

Rivero の論点は従節に否定の観念があるかどうかではないが、上例の従節には否定の意味が考えられないので、no の使用が認められないとすることはできよう。しかし、(27)では、“昨年もそうであったものが現在ではその程度が増した”とも考えられ、従節の否定の観念を必ずしも想定するものではないように思われる。

また、Moliner は que の並ばず、衝突のおこらない不定詞がくる場合

に、(18)の影響で(32), (33)において、カッコ内と同値になるとしている。さらに、名詞同士の比較(34)も同じことだとしている。¹⁰⁾

(32) Prefiero dar un paseo al aire libre que no meterme en un cine.

(= ~al aire libre a meterme en un cine)

(33) Es mejor ir a pie que no esperar el autobús.

(= ~que esperar el autobús)

(34) Estimo más su buen deseo que no el regalo.

以上のことから、不等比較文の従節での no の使用は、(1)否定の観念があると認められるか、(2)肯定されるものを強調することになるか、との2点で検討されてきた。いずれの場合にせよ、それが no の使用の動機となっているのであれば、この no がまったくの「虚辞」であるとするよりもなんらかの有標項として機能しているといってもあながち言い過ぎではないだろう。

用法③: 感嘆文の cuánto, qué de のあとで。ただし、今日では文語的。

(35) ¡Cuántas veces no lo había soñado en los últimos tiempos!

(L. Goytisolo)

(36) ¡Qué de angustias (no) habrán pasado!

この用法についてのなんらかの説明を与えているものはみつけれず、(36)のタイプのもの(37)は Real Academia Española (1973) にみつかったが、やはりそれに関しての解説はない。¹¹⁾

(37) ¡Qué de cosas no dijo!

また、Seco は Gabriel Miró の例として(38)をあげている。¹²⁾

(38) ¡Cuánto no le dolerá esa cabeza!

ここで考えられることは、cuánto, qué de 以外、たとえば cómo や cuál などにもこの用法がみられるかどうかという点である。しかし、現代語での例は少ないと思われるが、さらなる調査が必要であろう。

用法④: 文学的使用で危具の表現で.

フランス語にみられるこの用法はこれまでも色々議論されてきた。

(39)の no は que と置き換えられ(40)となるという。

(39) Temo no le haya sucedido alguna desgracia.

(40) Temo que le haya sucedido alguna desgracia.

この置き換えができることを Bello も述べていて、さらに no によって、文がより上品(elegante)になり、必要なものでもあると言っている。¹³⁾

(41) Temíase no fuesen socorridos los enemigos.(=Temíase fuesen)

また、アカデミアもこの置き換えを認めており、1973年版ではさらにこの no が疑念の副詞 acaso, quizá, tal vez に近い意味を持っているという。

(42) Temía no lo denunciasen los vecinos.(=Temíase que lo ~)

そして、この起源については、ラテン語にすでに存在したものがロマンス語で発展したが、現代より中世のほうがより多くみられると説明している。¹⁴⁾

Hanssen (1945) も通時的にこの用法を取りあげているが、従属節でこの no をとったものに temer, negar, evitar, prohibir, impedir, no negar, no evitar, no prohibir, no impedir, dudar をあげている。¹⁵⁾ このことから、中世を通じて多くこの用法がみられると考えられる。¹⁶⁾

さて、その起源と考えられているものは、否定の意味を持つ接続詞 ne が危具をあらわす動詞とともに用いられていたことに由来するものである。その通時的考察はおこなわないが、Rubio (1984) はラテン語を現代のスペイン語に訳す際に注意を与えている。¹⁷⁾

(43) Metuo : ne ueniat. (=Tengo miedo : ¡que no venga !)

(44) Metuo ne ueniat. (=Tengo miedo que venga.)

(45) Prohibeo : ne ueniat ! (=Lo prohibo : ¡que no venga !)

(46) Prohibeo ne ueniat. (=Prohibo que venga.)

(47) Rogo ne ueniat. (=Le ruego que no venga.)

(48) Moneo ne faciatis. (=Os aconsejo que no lo hagáis.)

われわれの興味とするところは(44)のスペイン語訳で no が使われていな

い点で、やはり(46)でも同様である。また、(47)(48)のように動詞の意味から no の現れてしかるべきものも例示している。この最後の2例と前者4例を比べると、ラテン語で同じ構文を取りながら現代スペイン語での結果が異なる点が注目される。つまり、単に ne だけを虚辞の no の出現理由にはできないわけで、フランス語で言われている潜在的な否定の観念が現れていると考えるのが目下のところの説明として広く認められているのである。

Moliner は(49)の文の前提には(50)(51)があると言っている。¹⁸⁾

(49) Temo no venga antes de que hayamos terminado.

(50) ¡No vaya a venir antes de que terminemos!

(51) ¿No vendrá antes de que terminemos?

このように、従節に本来現れないはずの no が出るということが潜在的な否定の観念の想定によって説明されるということは、やはり no になんらかの有標項としての機能を認めることができるのではないだろうか。

とすれば、ではなぜこういった危具の動詞のとき現れるのかを考えなければならぬし、そしてなぜ中世を通じてよく使われながらも次第に用いられなくなってきたのかが今後の考察の課題となってくるであろう。

用法⑤：否定文で hasta, a menos que のあとで頻繁に用いられる。

(52) No me iré de aquí hasta que (no) me diga la verdad.

(53) No cobrarás hasta que (no) encuentre trabajo.

(54) No era noticia hasta que no la publicaba ABC.(Cambio 16)

(55) Siguieron sin hacer nada hasta que llegó el capataz.

(56) Me quedaré aquí hasta que se ponga el sol.

Butt and Benjamin のあげる(52)~(56)はすべて hasta que の例で、(55)(56)は主節が肯定であるために hasta que 以下で no が現れないことを示すものである。しかし、a menos que の例はなく、Seco も(57)をあげているが a menos que のあとに no を用いる例は見あたらない。

(57) Ninguno se marchó hasta que no se acabó el vino.

hasta que の例については Bello もアカデミアの文法書も言及しておらず、宮本(1986)も指摘するように、用例としては実際よく見られるものの、文法書での扱いは限られたものになっている。

さて、この用法の原因について、考察しているのは Cuervo (1939) である。それによれば、*mientras* の構文に由来し、

(58) No se vaya mientras no lo llamen.

(59) No se vaya hasta que lo llamen.

(60) No se vaya hasta que no lo llamen.

(59)の *hasta* と(58)の *mientras* とが混同され、(60)が現れたという。¹⁹⁾この Cuervo の説明を取りあげ、解説している Kany (1969) によれば、この用法の隆盛期は18, 9世紀であるという。また、この *no* を省略する人は、おそらくこれがフランス語的な語法であろうと考えてのことであるとも言っている。²⁰⁾しかし、フランス語例を検討したさいにも述べたように、この *hasta que* にあたる *jusqu'à ce que* の場合には *ne* は現れないので、この説明には疑問が残る。

Moliner によれば、この *no* はよく見られる用例であるけれども、あいまいさが生じるという理由で文法家から批判されてきたという。²¹⁾

(61) No sembraremos hasta que no llueva.

そのあいまいさとは、この(61)で「雨が(もう)降らなくなるまで、つまり、やむまでまかない」のか、「雨が降るまでまかない」のかだというのが、Moliner はたとえ文法的には正しくても、前者の意味の時には(62)や(63)のように言うだろう、とそのあいまいさに対する解決を示している。

(62) No sembraremos hasta que ya no llueva.

(63) No sembraremos hasta que deje de llover.

Bosque (1980) も従来からの *hasta* の解釈を批判しているが、これを否定対極表現として捉えようとしている。この *no* の出現の原因はあまり明らかでないが、その余剰性は主節に否定があること、もしくは *mientras* との意味的交差 (*cruce semántico*) があることによるものだとされている。また、これは主節が否定のときにのみありうることだとも言っている。そして、最後にこれが中世スペイン語の *antes* または現代フランス語の *avant que* に相当する可能性もあると興味深い考えを提示している。

以上、いくつかの説明を紹介してきて、まとめられることは、まずその用例の原因に *mientras* との意味的關係が深いものだと考えている説明が多く、この *no* を生み出す条件として主節が否定されていることをあげているものが多い。ところが、実際の資料から調査した宮本(1986)によれば、主節が否定されていない時でさえ、(64)のように *no* が現れるという。²²⁾

(64) *Todas las personas son honorables hasta que no se demuestra lo contrario.*

もしこれらが *mientras* との交差によって起こり、主節が肯定の時にもひろがったと考えるなら、主節が否定のときも含め、この *no* を否定辞のひとつと考えることもできるのではないだろうか。

3. これまでに検討してきた諸説をまとめてみると、まず、「虚辞」と言われているものが、こういった形で現れているということは、そこに出現のためのなんらかの動機が想定されてしかるべきではないだろうか。そして、その動機が一般に「潜在する否定の観念」が具現されたものとして説明されているのである。この説明が有効であるかどうかはさらなる検討を要するが、少なくともそれが用いられている限り、そこには「虚」ではないなんらかの意味があるように思えてならない。

本稿では各用法の具体例の調査を検討していない。そこで、次号では以下にあげる点などにも留意して資料体からの調査結果を報告することにする。

まず、用法⑤の *hasta que* については、主節が肯定の時に *no* が現れる例がどれくらいあり、それにどのような他の条件が介在するのか、そこに働く要因はなにか、例えば個人差などがどのくらいあるのか、また、主節が否定の時に *no* が現れない例の場合はどうか、などを検討することが必要となろう。次に、用法①、②については、それが口語で見られるものであるということから、口語資料体の調査が不可欠となろう。また、これらの用法について、他の否定語 *nadie* や *nada* などについても検討してみる必要があると思われる。

また、これら以外にも用法がないのか、幅広く調査、検討をおこなっていくことにする。

〔追記〕 本稿は1992年12月25日、神戸市外国語大学でおこなわれた関西スペイン語学研究会第178回例会において同名のタイトルでおこなった口頭発表の内容に修正を加えたものである。この発表に関して、各先生方からさまざまなかたちで御指摘をいただきましたことを感謝します。特に、神戸市外国語大学の宮本正美先生と福崑教隆先生には、貴重なデータを御提供いただきましたことをお礼申し上げます。

注

- 1) 宮本(1980), 宮本(1986).
- 2) Bosque(1980), Rivero(1970).
- 3) 一般の辞書, 例えば Real Academia Española (1992) では, 後述するような不等比較文の例があがっている。
- 4) フランス語例文の後の略字 (A: 朝倉(1955), K: 小林(1988), M: Martinet(1984), S: 佐藤(1991), その後の数字はページ) はその出典を示す。
- 5) 朝倉(1955)によれば, このことは古語法と方言における完全否定の使用によって証明できるという。
- 6) この現象については, 後でスペイン語の説明の際にも触れるが, 本稿ではその通時的側面には深くは立ち入らない。
- 7) Martinet にはスペイン語訳がついているのでそのまま付けてある。
- 8) pp. 277-278 (§ 21. 1. 3.).
- 9) "más"の項, p. 359.
- 10) "no"の項, p. 513.
- 11) § 2. 7. 7. e.
- 12) "no"の項, p. 269.
- 13) § 983.
- 14) § 3. 19. 4. d.
- 15) § 645.
- 16) 岡本(1991)は, 中世・古典でのこの用法の実態を詳しく調査している。
- 17) p. 344.
- 18) "no"の項, p. 513.
- 19) pp. 337-338.

20) p. 429.

21) "hasta"の項, pp. 21-22.

22) Diccionario ilustrado Básico Sopena idiomático y sintáctico からの例.

参考文献

朝倉季雄(1992)フランス文法辞典。(第29刷)白水社.

Bello, A. y Cuervo, R. J.(1949) Gramática de la lengua castellana. 2ª ed. Ed. Sopena.

Bosque, I.(1980) Sobre la negación. Cátedra.

Butt, J. and Benjamin, C.(1989) A New Reference Grammar Of Modern Spanish. 2ª ed. Edward Arnold.

Cuervo, R. J.(1939) Apuntaciones críticas sobre el lenguaje bogotano. Ed. EL GRAFICO.

Gili Gaya, S.(1983) Curso superior de sintaxis española. 15ª ed. BIBLO-GRAF.

Hanssen, F.(1945) Gramática histórica de la lengua castellana. Ed. EL ATENEO.

Kany, C. E.(1969) Sintaxis hispanoamericana. Gredos.

小林正(1988) テーブル式フランス語便覧. 評論社.

Lázaro Carreter, F.(1984) Diccionario de términos filológicos. 3ª ed. Gredos.

Mertinet, A.(1984) Gramática funcional del francés. Ariel.

宮本博司(1980) スペイン語における虚辞の No について—「おそれ」の意を含む文の場合—. 語学研究24.

——(1986) スペイン語における虚辞の No について(2)—hasta の後で用いられる場合—. 語学研究45.

Moliner, M.(1983) Diccionario de uso del español(H-Z). 2ª ed. Gredos.

Mounin, G.(1982) Diccionario de lingüística. EDITORIAL LABOR.

岡本信照(1991) 中世・古典スペイン語における "虚辞の no" について. 京都外国語大学研究論叢37.

Real Academia Española(1973) Esbozo de una nueva gramática de la lengua española. Espasa-Calpe.

——(1984) Gramática de la lengua castellana 1771. EDITORA NACIONAL.

——(1992) Diccionario de la lengua española.

21ª ed, Espasa-Calpe.

Rivero, M. L.(1970) A surface structure constraint on negation in Spanish. *Language*, 46.

Rubio, L.(1984) Introducción a la sintaxis estructural del latín. 2ª ed. Ariel.

佐藤房吉・大木健・佐藤正明(1991) 詳解フランス文典. 駿河台出版社.

Seco, M.(1986) Diccionario de dudas y dificultades de la lengua española. 9ª ed. Espasa-Calpe.